日本書道史 (37)

前田 龍雲

良寛（一七五八年～一八三一年）は江戸時代後期の曹洞宗の僧侶、歌人、漢詩人、書家。俗名、山本栄蔵または文孝。号は大愚。

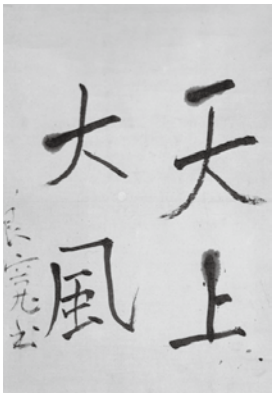
良寛は越後国出雲崎（現・新潟県三島郡出雲崎町）に出生。四男三女の長子。父、山本左門泰雄はこの地区の名主・橘屋であり、石井神社の祠職を務め、以南という俳人でもあった（異説あり）。名主見習いだった良寛は十八歳のとき出家したが、この時期には妻が居たとする説が最近出ている。

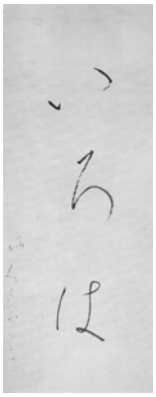
出家後、玉島（岡山県倉敷市）の円通寺の国仙和尚に師事し、諸国を転々と廻る。その頃義提尼より和歌の影響を受ける。中国、四国、九州を行脚し、京都から高野山に上り四〇歳を過ぎてから越後に帰った。

四十八歳のとき、越後国蒲原郡国上村（現新潟県燕市）国上山国上寺の五合庵、六十一歳のとき、乙子神社境内の草庵、七十歳のとき島崎村（現新潟県長岡市）の木村元右衛門邸内にそれぞれ住んだ。無欲恬淡な性格で、生涯寺を持たず、無一物の托鉢生活を営み位階はない。諸民に信頼され、良く教化に努めた。良寛自身、難しい説法を民衆に対しては行わず、自らの質素な生活を示す事や、簡単な言葉（格言）によって一般庶民に解り易く仏法を説いた。その姿勢は一般民衆のみならず、様々な人々の共感や信頼を得ることになった。

最期を看取った弟子の貞心尼が『蓮の露』に良寛の和歌を集めた。良寛は他に漢詩、狂歌、俳句、俗謡に巧みで、能書家であった。良寛の書は古典を正確に学び、人格がにじみ出ていて高く評価され、愛好する人が多い。ゆえに、贋作が多く存在するのは残念である。

良寛は「子供の純真な心こそが誠の仏の心」と解釈し、子供達と遊ぶことを好み、かくれんぼや、手毬をついたりしてよく遊んだという（懐には常に手毬とおはじきを入れていたらしい）。名書家として知られた良寛であったが、高名な人物からの書の依頼は断る傾向があった。が、子供達から「凧に文字を書いて欲しい」と頼まれた時には喜んで『天上大風』の字を書いた。ある日の夕暮れ時にも、良寛は隠れん坊をして子供達と遊んでいて、自分が隠れる番になり、田んぼにうまく隠れ得た。しかし、日が暮れて暗くなり、子供達は、良寛だけを探し出せないまま、家に帰ってしまった。翌朝早くに、ある農夫が田んぼに来ると、そこに良寛が居たので、驚いて問い質すと、良寛は、「静かに。そんな大声を出せば、子供達に見つかってしまうではないか」と言ったという。このような類い





の話が多く伝えられ、子供向けの童話などとして紹介されることで、良寛に対する親しみ深い印象が、現在にまで伝えられている。

また戒律の厳しい禅宗の僧侶でありながら般若湯（酒）を好み、良寛を慕う民と頻繁に杯を交わした。また弟子の貞心尼に対してほのかな恋心を抱いていたともいわれている。

今日、生家跡に良寛堂、国上山五合庵跡に小庵、乙子神社の庵跡には良寛の詩と歌を刻んだ碑が建てられ、島崎の木村家邸内には遷化（せんげ）跡の標示と良寛遺宝堂、出雲崎町に良寛記念館がある。良寛堂の裏手には良寛の坐像がありその視線の先には日本海が広がっている。沖に見える島影は、良寛の母のふるさと佐渡島である。

和島村（現新潟県長岡市）の真宗大谷派隆泉寺境内木村家墓地内に眠る。

日本書道史

(38)

前田 龍雲

池大雅

池 大雅（一七二三年～一七七六年）は、日本の江戸時代の文人画家、書家。

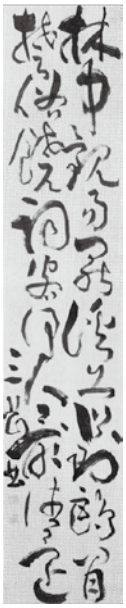
本来の苗字は池野だが、中国風に池と名乗った。幼名は又次郎。諱は勤、無名、字は公敏、貨成。日常生活には池野秋平の通称を名乗った。雅号は数多く名乗り、大雅堂、待賈堂、三岳道者、霞樵などが知られている。

妻の町は玉蘭と号し、大雅風の山水画をよくする女流画家として知られる。弟子に木村兼葭堂、青木夙夜、野呂介石、桑山玉洲などがいる。

一七二三年、京都銀座役人の下役の子として生まれる。父を四歳の時に亡くし、経済的に苦しい中、六歳で素読を始め、七歳から本格的に唐様の書を学び始める。習い始めたばかりの頃、萬福寺で書を披露し、その出来栄えに僧たちから「神童」と絶賛された。柳里恭（柳沢淇園）に才能を見出され、文人画を伝えられた。

大雅の作風は、単に中国の南宗画様式を忠実に模倣したものではなく、桃山以来の障屏画をはじめ土佐派や琳派などの日本の装飾画法、さらには新知見の西洋画の写実的画法までをも主体的に受容し、総合したもので、のびのびと走る柔らかな描線や明るく澄んだ色彩の配合、さらに奥深く広闊な空間把握をそのよき特徴としている。

日本の自然を詩情豊かに写した『陸奥奇勝図巻』（一七四九年）や『児島湾真景図』、中国的主題による『山水人物図襖』（国宝、高野山遍照光院）や『楼閣山水図（岳陽楼・酔翁亭図）屏風』（国宝、東京国立博物館）、『瀟湘勝概図屏風』などの障屏画、さらに川端康成の蒐集品として著名な『十便十宜図』は、中国・清の李漁の『十便十宜詩』に基づき、山荘での隠遁生活の便宜を画題に大雅と蕪村が共作した画帖である（大雅は「十便図」を担当）。小品ながら、文人の理想とする俗塵を離れた生活を軽妙な筆遣いと上品で控えめな色彩で活写している。



唐詩五言絶句

十便十宜図のうち、釣便図

また、おおらかな人柄を伝える俗気ない大雅の書は、江戸時代書道史にひときわ光彩を放つものとして評価が高い。

大雅は董其昌の「万巻の書を読み万里の路を行く」という文人画の方法論に従ったためか、旅と登山を好んだ。篆刻家にして画家の高芙蓉、書家にして画家の韓天寿ととくに親密に交友している。

ある日京都の庵で仲間と富士山の話をしていて盛り上がり、『ならば登ろうではないか』と、いきなり旅支度を始め、富士山に行き旅巡りをして一か月以上して帰って来た。人々はこれを雅談だと讃えた、というエピソードが残っている。白山、立山、富士山の三霊山をともに踏破して、その一部の紀行日記とスケッチを残している（三岳紀行）。こうした旅と登山の体験は、大雅の絵の特色である広々とした絵画展開と、リズム感のある描線となって生かされる事になった。

楼閣山水図

日本書道史

(39)

前田 龍雲

市河米庵（一七七九年～一八五八年）は、江戸時代後期の日本の唐様書家、漢詩人。名は三亥、字は孔陽、号は米庵のほかに楽斎・百筆斎・亦顛道人・小山林堂・金洞山人・金羽山人・西野子など。通称は小左衛門。巻菱湖、貫名菘翁とともに幕末の三筆に数えられる。

漢詩人の市河寛斎の長子。一七七九年己亥九月亥の日（九月十六日）の亥の刻に江戸日本橋桶町に生まれたので三亥と名付けられた。

父 寛斎や林述斎・柴野栗山に師事し、書は長崎に遊学し清国の胡兆新に学ぶ。その後、宋代の書家 米芾や顔真卿の書を敬愛し、その筆法を研鑽する。米庵という号は米芾に由る。

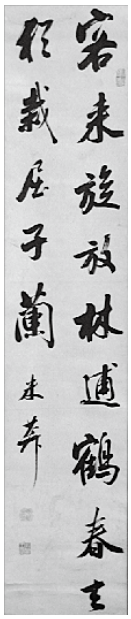
隷書・楷書を得意とし、一七九九年、二〇歳の時に書塾小山林堂を開いた。その後、和泉橋藤堂候西門前に大きな屋敷を構え、門人は延べ五千人に達したという。徳川、藤堂、毛利、間部家などの大名にも指南を行った。

一八一一年に富山藩に仕えたが、一八二一年に家禄三〇〇石をもって加賀藩前田家に仕え、江戸と金沢を往復し指導に当たった。

篆刻も嗜み、印譜『爽軒試銕』を遺す。文房清玩に凝り中国の書画収蔵と研究でも知られる。また煎茶を嗜み、松井釣古の主人であった加賀屋清兵衛に楓川亭と命名している。『米庵墨談』など多数の著述がある。

一八五八年八〇歳で世を去る。

渡辺崋山「市河米庵像」



市河米庵七言詩

巻菱湖（一七七七年～一八四三年）は、江戸時代後期の日本の書家。越後国巻（現在の新潟市）に生まれる。姓は池田、後に巻を名乗る。名は大任、字は致遠または起巌、菱湖は号で、別号に弘斎。通称は右内と称した。

明治政府の官用文字は御家流から菱湖流に改められ、菱湖の門下生は一万人を超えたと伝えられている。市河米庵、貫名菘翁と共に幕末の三筆。

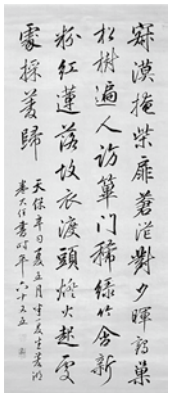
幼少の頃から新潟町で育ち、寺の住職に書の手ほどきを受けた。母親が自害した後、十九歳で江戸へ行き、書家の亀田鵬斎に師事して書と詩を学び、晋唐以前の書法に傾倒した。

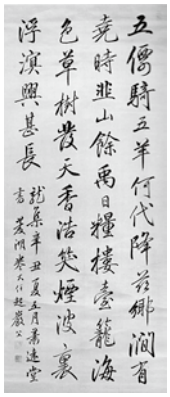
二十九歳の時、『十体源流』を著し、書塾「蕭遠堂」を開く。五十三歳の時、近衛家にあった賀知章の『孝経』を見て驚倒したという。漢詩も能くし、酒を好み、一八四三年六十七歳で没した。

菱湖は篆書・隷書・楷書・行書・草書・仮名のすべてに巧みで、特に楷書を得意とした。平明で端麗な書体は、千字文などにより、世に広く書の手本として用いられ、「菱湖流」と呼ばれた書風は幕末から明治にかけての書道界に大きな影響を与えた。

現在でも将棋の駒においては、銘駒と呼ばれる書体の一つとして知られ、タイトル戦などで使用される高級な駒などによく用いられており、この書体を好む棋士も多いという。なお、菱湖自身が駒の書体を確立したわけではなく、大正時代頃に将棋の専門棋士で、阪田三吉の弟子だった高濱禎が菱湖の書体を駒字に作り替えたものである。

門弟に菱湖四天王（萩原秋巌・中沢雪城・大竹蒋塘・生方鼎斎）や巻鴎洲などがいた。鴎洲は菱湖の子で、優れた才能を持ちながら病弱のため早世。巻菱潭は鴎洲の門人で、鴎洲没後、養子となり跡をついだ。





巻菱湖・五仙騎五羊

日本書道史 (40)

前田 龍雲

貫名菘翁（一七七八年～一八六三年）は江戸時代後期の儒学者、書家、文人画家。

姓は吉井（後に家祖の旧姓貫名に復する）。名は苞（しげる）。字は君茂（くんも）、子善。通称は政三郎、のちに省吾とし、さらに泰次郎と改める。号は海仙、海客、海屋、海叟、摘菘人、摘菘翁、菘翁など多数。別に方竹山人、須静主人、三緘主人などと名のっている。海屋、菘翁が一般に知られている。

学問においては、はじめ木村蘭皐、高橋赤水に就いて儒学を学んだ。十七歳の頃、母方の叔父を頼り高野山で学問に励み、山内の図書を多数読んだと伝えられる。その後大坂の懐徳堂に入門し、中井竹山の下で経学や史学を学び、やがて塾頭になる。文化五年頃、京都に移ると私塾須静堂を開き朱子学を中心に教えた。晩年は聖護院付近に移り住み、名産の野菜菘に因んで菘翁と号した。最晩年になって下賀茂に隠居し、下賀茂神社に自らの蔵書を奉納したときの目録「蓼倉文庫蔵書目録」が残されており、菘翁が学問を重視していた姿勢が窺われる。

詩文は矢上快雨に学んでいる。唐詩を好み、頼山陽と声律を論じたことは有名である。当時は絶句が流行しており、菘翁の漢詩は『文政十七家絶句』などの多くの絶句集に掲載された。「増註聯珠詩格」や徐文弼の「詩法纂要」を校刊し門弟の参考書とした。

書では、少年期、西宣行に米元章の書風を学んだ。高野山では空海の真蹟に強く啓発されて敬慕し続け、五十八歳のとき四国に渡り萩原寺（現 香川県観音寺市大野原町萩原）に滞在して秘蔵される伝空海「急就章」（萩原寺蔵・重要文化財）を臨模している。後に墨拓としてこれを刊行しその跋を書いている。この跋には、空海の書は東寺にある有名な「風信帖」とこの「急就章」がもっともよいとし、その源流を奈良時代の魚養に求め、さらに魚養は唐写経に由来すると述べている。

当時の墨帖は粗末なものが多く到底手習いの元とすることはできなかった。菘翁は王羲之・王献之の正しい伝統を確実に把握することに努めた。このため古典や真蹟を重んじ、それが適わなければ法帖や碑版を蒐集し臨書して学んだ。唐代の鄭審則の書についても、わざわざ比叡山に登ってこれを臨模している。

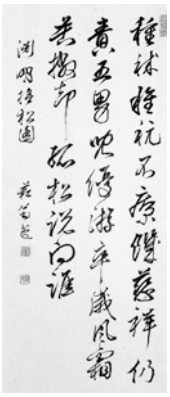
山水図（雲仙秋景図）

書風は当時流行の明清風の唐様に対して唐晋風とされ、楷書は欧陽詢、虞世南、褚遂良、顔真卿に、行書は王羲之、褚遂良、草書は孫過庭に影響された。日下部鳴鶴は菘翁が晩年になるほど筆力が強くなっていると驚嘆している。書画で盛名をほしいままにしたが、特に書は市河米庵・巻菱湖と並んで幕末の三筆に数えられ「近世第一の能書家」と称えられた。

最晩年八十五歳の時に中風で倒れるが挫けず、筆を握り続け書画の制作に打ち込む。このときの作品を「中風様」と呼び、傑作とされる。

画は叔父矢野典博に狩野派の画法を学んだが、明の銭穀の「真景山水図」を観て以来、文人画に傾倒する。後に大坂では鼎春岳、濱田杏堂、京都では浦上春琴、中林竹洞、山本梅逸ら、当時一流の文人画家と親しく交流するうち文人画の技法を修得したものと推察される。還暦を目前に長崎では祖門鉄翁から南画の画法を受けた。田能村竹田はその著『竹田荘師友画録』で頼山陽や野呂介石と並べて菘翁の「送行図巻」を激賞した。精緻な山水画の他にも墨竹や菊・松などの題材を好んで画いている。門弟に多くの優れた文人画家が育った。また、菘翁は画論にも長けており五十六歳の頃、伊勢の浜地庸山の著した中国画論『山水高趣』に題言を寄せ、紀春琴の『論画詩』にも評を加えている。

山水詩画双幅



七言絶句

日本書道史 (41)

前田 龍雲

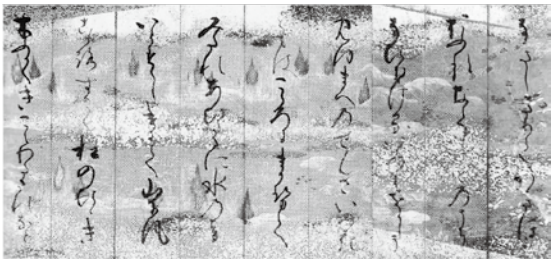
6、江戸時代の和様

近衛 信尹（一五六五～一六一四年）は、安土桃山時代の公家。近衛前久の子。母は波多野惣七の娘。初名、信基、信輔。号は三藐院。

一五七七年に元服。加冠の役をつとめたのが織田信長で、信長から一字を賜り信基と名乗る。一五八〇年に内大臣、一五八五年に左大臣となる。関白の位をめぐり二条昭実と口論となり、菊亭晴季の蠢動で、豊臣秀吉に関白就任の口実を与えてしまった。実に藤原氏一門以外の者が関白についたのは、秀吉と甥の豊臣秀次だけである。秀吉が秀次に関白位を譲ったことに、内心、穏やかではなく、一五九二年正月に左大臣を辞した。

信尹は、幼い頃から父とともに地方で過ごし、信長の小姓らと仲良くする機会が多かったために武士に憧れていたという。朝鮮出兵の時も渡海するため京都を出奔し肥前名護屋に赴いた。後陽成天皇はこれを危惧し、勅書を秀吉に賜って信尹の渡海をくい止めようと図った。余りに奔放な行動であり、一五九四年、後陽成天皇の勅勘を蒙る羽目に陥った。

信尹は薩摩に三年間配流となり、その間の事情を日記「三藐院記」に詳述した。京より四十五人の供を連れ、坊の御仮屋に滞在、諸所を散策、坊津八景、枕崎・鹿籠八景等の和歌を詠んだ。地元に親しみ、書画を教え、豊祭殿の秋祭や御所言葉、都の文化を伝播。当代一流の文化人として薩摩の文化に貢献した。またこの時期書道に開眼したとされる。書道は青蓮院流を学び、更にこれを発展させて一派を形成し、近衛流、または三藐院流と称される。本阿弥光悦、松花堂昭乗とともに「寛永の三筆」と後世、能書を称えられた。



源氏物語抄

配流中の世話役であった御仮屋守・曖・宮田但馬守宗義に「信」の字を与え信景とした。現在、近衛屋敷跡は近衛公園となり、近衛文麿に依る碑も建立、お手植えの藤は季節に花を咲かせる。

一五九六年勅許が下り京都に戻る。一六〇〇年、関ヶ原の乱の後、左大臣に復職。一六〇五年には念願の関白となる。一六一四年薨去。享年五十歳。京都東福寺に葬られる。信尹には庶子しか居なかったので、後陽成天皇第四皇子で信尹の同腹の妹中和門院前子の産んだ二宮を後継に選び、近衛信尋を名のり継がせた。

本阿弥 光悦（一五五八～一六三七年）は、江戸時代初期の書家、陶芸家、芸術家。書は寛永の三筆の一人と称され、その書流は光悦流の祖と仰がれる。

刀剣の鑑定、研磨、浄拭を家業とする京都の本阿弥光二の長男として生まれる。父光二は、元々多賀高忠の次男片岡次大夫の次男で、初め子がなかった本阿弥光心の婿養子となったが、後に光心に実子が生まれたため、自ら本家を退き別家を立てた。光悦もこうした刀剣関係の家業に従ったことと思われるが、手紙の中に刀剣に触れたものは殆どみられない。今日では「寛永の三筆」の一人に位置づけられる書家として、また、陶芸、漆芸、出版、茶の湯などにも携わった文化人としてその名を残す。

光悦は、洛北に芸術村（光悦村）を築いたことでも知られる。一六一五年、光悦は、徳川家康から鷹峯の地を拝領し、本阿弥一族や町衆、職人などの法華宗徒仲間を率いて移住した。王朝文化を尊重し、後水尾天皇の庇護の下、朝廷ともつながりの深かった光悦を都から遠ざけようというのが、家康の真の意図だったとも言われるが定かではない。光悦の死後、光悦の屋敷は日蓮宗の寺（光悦寺）となっている。

俵屋宗達、尾形光琳とともに、琳派の創始者として、光悦が後世の日本文化に与えた影響は大きい。陶芸では常慶に習ったと思われる楽焼の茶碗、漆芸では装飾的な図柄の硯箱などが知られるが、本人がどこまで制作に関与したかは定かではない。

『蓮下絵和歌巻』　本阿弥光悦書、俵屋宗達画

日本書道史 (42)

前田 龍雲

松花堂 昭乗（一五八二～一六三九年）は、江戸時代初期の真言宗の僧侶、文化人。俗名は中沼式部。堺の出身。豊臣秀次の子息との俗説もある。

書道、絵画、茶道に堪能で、特に能書家として高名であり、書を近衛前久に学び、大師流や定家流も学び、独自の松花堂流（滝本流ともいう）という書風を編み出し、近衛信尹、本阿弥光悦とともに「寛永の三筆」と称せられた。なお松花堂弁当については、その名が昭乗に間接的に由来するとする説がある。

昭乗の兄（中沼左京）が一乗院門跡尊勢（近衛信尹の次弟）に仕えていたことにより、一五九三年頃近衛信尹に仕える。一五九八年、石清水八幡宮に入り出家、瀧本坊実乗に師事して密教を学ぶ。その後、権僧都宝弁について両部灌頂をうけ阿闍梨位に上がった。

一六一五年五月、大坂落城後、狩野山楽を匿っていたことで徳川方の厳しい詮索を受けたが、昭乗は「山楽は絵師であって武士にあらず」と言い張り、事なきを得る。

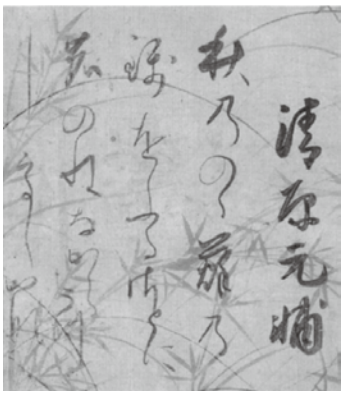
一六一九年、徳川義直と近衛信尋を対面させるため奔走。一六二三年、将軍秀忠・家光の上洛に際しての準備に奔走。翌年、近衛信尋の推挙で将軍家書道師範として江戸に下向する。

一六二六年、徳川義直を席主とした茶会（昭乗は小堀遠州とともに近衛信尋、一条昭良、一乗院尊覚法親王、八条宮智仁親王等を招待）を催し、公武間の斡旋に尽力する。

一六二七年実乗の死後、瀧本坊住職となる。

一六二八年大徳寺龍光院蜜庵で、江月宗玩のために小堀遠州、狩野探幽とともに絵筆をふるう（床脇小襖絵）。小堀遠州は昭乗のために瀧本坊に茶室「閑雲軒」をつくる。一六三七年、瀧本坊の焼失を期に瀧本坊を弟子の乗淳（昭乗の兄中沼左京の子）に譲り、自らは猩々と号して風雅の生活を送る。十二月、住坊泉坊の一隅に方丈を建てて松花堂と称した。

一六三九年頃から昭乗の背中に腫物ができ、昭乗は痛みをこらえる日々が続いた。昭乗の師であった実乗、また実乗の師の乗裕も背中に腫物ができ、それが原因で亡くなっていることから、この時に自分の死期を悟った模様。伏見奉行だった小堀遠州は、昭乗を伏見に呼び、名医による治療を受けさせたが効果はなく、同年九月十八日、五十五歳の生涯を閉じた。本阿弥光悦の八〇歳など「寛永の三筆」の中では短命であった。



三十六歌仙色紙

加藤 千蔭（一七三五～一八〇八年）は、江戸時代中期から後期にかけての国学者・歌人・書家。父は加藤枝直。姓を橘氏とすることから、橘千蔭とも称する。通称は又左衛門。字は常世麿。号は芳宜園など。

歌人で江戸町奉行の与力であった父・枝直の後をついで吟味役となったが、寛政の改革にあたり、一七八八年町奉行与力を辞し、学芸に専念した。

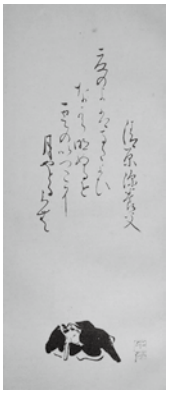
若くして諸芸を学んだが、特に国学を賀茂真淵に学び、退隠後、師真淵の業を受け継ぎ、同じく真淵の弟子であった本居宣長の協力を得て『万葉集略解』を著した。

和歌については、千蔭の歌風は『古今和歌集』前後の時期の和歌を理想とする高調典雅なもので、村田春海と並び称され、歌道の発展に大きく貢献し、万葉学の重鎮として慕われた。門人に大石千引や清原雄風がいる。

書に秀で、松花堂昭乗にならい和様書家として一家をなし、仮名書の法帖を数多く出版した。

絵は、はじめ建部綾足に漢画を学んだが、その後大和絵風の絵画に転じた。

行草書五字



千蔭百人一首

日本書道史 (43)

前田 龍雲

近衛 家熙（一六六七年～一七三六年）は、江戸時代前期から中期にかけての公家。父は関白太政大臣をつとめた近衛基熙、母は後水尾天皇の皇女の常子内親王。

一六六七年京都で誕生。幼名は増君。一六七三年に元服し、従五位上に叙せられた。同時に昇殿を許される。一六七六年、従三位に叙せられる。一六八六年二〇歳で内大臣となる。一六九三年に右大臣、一七〇四年左大臣。一七〇七年関白に就任する。一七〇九年に中御門天皇の摂政となり、更に翌年に太政大臣に任ぜられる。一七一一年太政大臣辞任。一七一二年摂政辞任。一七二五年准三后の宣下。同年十二月に落飾し、豫樂院と号する。家熙の号には墨汝・虚舟子また吾楽軒・昭々堂主人などがある。

書道は、はじめ加茂流を学び、更に近衛家や他に伝わる空海・小野道風らの書に学び独自の境地を切り開いた。家熙の父・祖父とも、曽祖父の近衛信尋が寛永の三筆にあげられた近衛信尹の養子となったことから三藐院流を継承。三藐院流とは近衛信尹の書を祖とする流派で、禅僧の書の雄勁剛強をまじえた独特の書風はひろく世におこなわれた。家熙も三藐院流を学ぶべきなのであろうが、賀茂流藤木敦直を学んでいる。家熙の書例を見ると、自運による詩歌文章があり、加えて古典臨書が数多く遺されている。その臨書対象は、わが国の漢字、仮名の名跡古筆をはじめ、中国の碑法帖にまで及ぶ。また、その多くが真筆からの臨書や摸書・双鈎であることも特筆される。その態度は、原本に忠実で摸書双鈎などは虫喰までも写し、使用料紙を複製している。

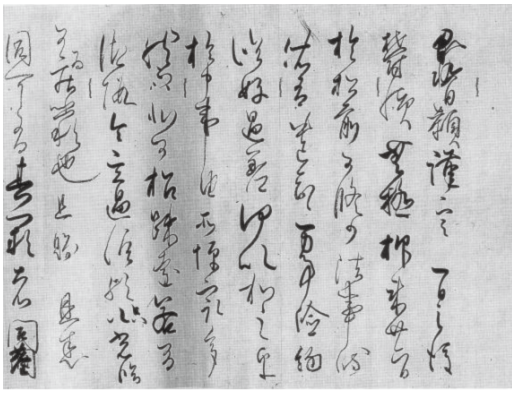
我が国の書は、中国書道と密接にむすびついた三筆に始まって以来、各時代に特徴ある書は表れるものの、多くは流派書道いわゆる伝授書道が大勢を占めてきた。これを打破したのは江戸期の唐様の流行だが、これも当時の中国書の移入であり、一時であった。明治に入り、清朝書法との直結により中国書の原点に、いわば三筆の原点に回帰することになる。こうした我が国の書史のなかで、家熙は数少ない古典臨書に徹した人と言えよう。臨書という点では良寛なども当たるが、その臨書対象の広さは家熙ただ一人と言ってよい程だ。家熙臨本には、原跡が今日伝わらないものが少なくない。家熙臨本によってのみ知られるこれらは大切な研究資料となっている。

絵画は水墨画を好んで描き佳作と評される。茶道は慈胤法親王を師とした。有職故実にも堪能で、礼典儀礼を研究し、『唐六典』の校勘を長年継続して、致仕後の一七二四年に二〇年の歳月をかけて完成させ、家熙の没後に刊行された。また、公家茶道に通じた茶人であり、『槐記』に見られるように、自ら茶事をおこない、侘び茶人との交流でも知られる。

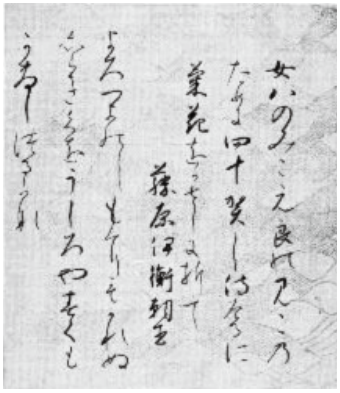
なお、家熙の人となりや博学多才ぶり、高い見識のほどについては、侍医（専門は現代で言う小児科）で、茶人であった山科道安がその言行を日録風に記した『槐記』十一巻により、如実に知ることができる。

一七三六年十月三日薨去。享年七〇歳。京都市北区の京都大徳寺に葬られる。

家熙は一七三一年、雷鳴と稲妻とは同時に発生するものとし、距離に比例して雷鳴が後れることを書き記している。



臨　藤原佐理『松前帖』



近衛家熙『後撰和歌集』

日本書道史 (44)

前田 龍雲

一〇、明治時代

1、明治時代

明治天皇が十二月に即位、王政復古の大号令を発し、新政府は天皇を中心とした新しい国家体制を築くことを目指して、江戸を東京と改め、天皇が東京に行幸してここを日本の新しい政治の中心に据えた（東京奠都）。この明治天皇の治世が明治時代と呼ばれている。明治政府の樹立に大きな役割を果たした薩長土肥の四藩は新政府でも強大な権力を握った。なお、幕末には薩長と共に尊王攘夷運動を主導してきた水戸藩は「天狗党」と「諸生党」の藩内抗争で人材が失われ、明治新政府ではめぼしい人材は皆無となってしまった。

尊皇思想に基づき、天皇は親政を行い、人民を直接統治するとした。しかし、一八九〇年（明治二十三年）に大日本帝国憲法（明治憲法）が施行されるまでは、明治天皇は青年期であり、天皇以外にも薩摩藩や長州藩の出身者が政治の実権を握っていた。明治改元の時には、明朝時代の中国を模倣して一世一元の制を定め、天皇の名（厳密には追号）を元号として、それまでの陰陽五行思想的改元を廃止した。

この明治時代は、欧米列強の植民地化を免れる為に近代化を推進した時代であり、世界史的に見れば、日本の産業革命時代である。西洋化と近代化が幕末から始まって明治年間で達成されたことから、「幕末・明治」とくくられる事も多い。なお、「幕末・明治」というくくりは、不平等条約の締結（一八五四年（安政元年））から完全撤廃（一九一一年（明治四十四年））までの時代と一致する。中央集権的な王政復古の過程から「王政維新」ともいわれる。また、一八七〇年代（明治初期）は文明開化を略し「開化期」とも呼ばれている。

2、明治時代の書

江戸時代末期、「御家流でなければ書にして書にあらず」という偏見があったが、御家流全盛の時代にも唐様を書くものがあり、その多くは文人墨客・儒学者・医者などであった。幕府が倒れて明治政府になり、政治の中心である太政官の文書課には、幕府時代の唐様を書く人々が多く職を奉じるようになった。巌谷一六・日下部鳴鶴・長松秋琴・菱田海鴎・北川泰明などによって宮中府中の文書は唐様で執筆されるようなり、日本の書風に一大変遷を来たした原因となった。当時の唐様といえば、西では海屋流、東では菱湖流・米庵流などが新派の頭目であった。それから十年程は変遷もなく、しばらく唐様が発展した。

金石学に通じていた楊守敬が明治十三年（一八八〇年）に来朝し、日下部鳴鶴などに六朝の書法を伝え六朝派の書風が始まる。その後、中林梧竹が渡清し書法の研究に従事した。この梧竹の留学と楊守敬の来朝によって、維新の初年、御家流を滅ぼした唐様の新派に代わって六朝書道が流行するに至ったのである。それ以来、明治の終局まで大体において我が国の書風に変化というものはなかったようだ。

要守孝

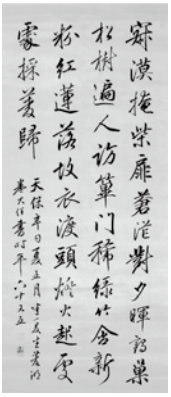
日本書道史

(45)

前田 龍雲

3、菱湖流

唐様の新派の中で巻菱湖の書風が隆盛。仮名も菱湖の字体に調和した千蔭流が用いられた。欧陽詢風の新鮮で明るい菱湖流が明治維新の新興の感覚に受け入れられ、明治政府の官用文字は御家流から菱湖流に改められた。中沢雪城が師風を継承し、後に巌谷一六・西川春洞などの大家を輩出する。また、菱湖の門弟の巻菱潭が習字教科書の執筆者になるなど、菱湖流は主に教育面と実用面でその後も貢献する。



4、楊守敬の渡来とその影響

明治十三年（一八八〇年）に楊守敬は漢魏六朝の碑帖一万三千点を携えて来日。それまで貧弱な版本を頼りに研究していた日本の書道界に大きな影響を与え、特に漢碑や北魏の碑に注目が集まった。奈良時代以降、日本の書は晋唐・宋・元・明清の書を典拠にしてきており、漢碑や北碑は日下部鳴鶴らの目に奇異で新鮮に映った。そして巌谷一六・松田雪柯・日下部鳴鶴の三人は、ほとんど日課の様に楊守敬を訪ね書法を問い、これが六朝書道流行の発端となった。この後、日本人の渡清が相次ぐ。

明治十五年（一八八二年）中林梧竹が余元眉とともに清に渡り潘存を訪れ書法の研究に従事した。帰国後、長崎方面で六朝派の書風を鼓吹し、後に東上して日下部鳴鶴らと交流したが、楊守敬の説とは往々見解が異なっていた。しかし、この梧竹の留学は楊守敬の来朝とともに六朝風勃興の最大原因となった。続いて明治二十四年（一八九一年）鳴鶴が渡清し、兪樾、楊峴、呉大澂などの大家を尋ねた。

5、徐三庚の影響

北方心泉は明治一〇年（一八七七年）、東本願寺の命により布教のために渡清。その後も数度渡航し、兪樾と交わるが、当時の大家徐三庚を最もよく学んだと言われる。岸田吟香と円山大迂は明治十二年（一八七九年）頃、吟香が上海に開いた商業上の関係を機縁として徐三庚に親近し教えを受けた。秋山碧城は明治十九年（一八八六年）渡清し、徐三庚のもとで永年学び、師の書風を伝えている。西川春洞は日本で秋山碧城が清から持ち帰った徐三庚の書を学び、徐三庚へ傾倒した。当時は通常、楷・行・草書を学ぶまでであったが、春洞は書域を隷書・篆書まで広げた。

6、帖学派と碑学派

明治に入って清の碑学派との交流により、北碑の書などを中心に新風ができたが、これに同調しない動きもあった。成瀬大域、長三洲、日高梅溪、吉田晩稼、金井金洞などは伝統的な書を守ろうとし、唐の顔真卿の書法を主張した。そして長三洲の門弟の日高梅溪が国定習字教科書の執筆者となったことから、この時代の教科書の書風は顔法になっている。このような保守派と革新派との対立は、丁度、清の帖学派と碑学派に酷似している。

7、かな

依然として御家流が根強い人気であったが、上代様に対する知識の普及に力を傾倒した「難波津会」が三条梨堂、東久世竹亭、小杉榲邨、高崎正風、大口周魚、阪正臣、田中光顕らによって創設。この「難波津会」の運動は、伝来の御家流に修正を加える努力を開始し、今日のかな書道の基底を形成する上に大きく貢献した。かな書道における重要な人々はほとんど「難波津会」に属していた。また明治二十九年（一八九六年）には大口周魚が西本願寺から『西本願寺本三十六人家集』の完本を発見し、平安仮名の粋を紹介した。

8、建碑の流行

江戸時代後期から大正時代にかけて建碑が流行し、文人たちの碑が多数残っている。明治二十六年頃から建碑ブームとなり、日下部鳴鶴は全国行脚し、その碑文は千数百基に及ぶといわれる。巌谷一六は鳴鶴に次ぐ。その他、西川春洞、柳田正斎、長三洲、野村素軒、金井金洞、宮島詠士など多数の書家が携わった。また、明治天皇の勅命により神道碑が明治から大正時代にかけて八基建てられた。

明治初期の政治家の中には書に通じた人物が多く、鳥尾小弥太や山岡鉄舟らは代表的である。また、元勲の中には能書が多く、勝海舟、広沢真臣、伊藤博文、木戸孝允、大久保利通、三条実美、西郷隆盛などがあげられ、大正に入ってからも犬養毅などによって書の振興が行われ、神道碑が建てられている政治家も多い。

日下部鳴鶴と巻菱湖の碑文原稿

＊先月号掲載の写真の「要守孝」は、正しくは「楊守敬」です。訂正してお詫び申し上げます。

日本書道史（46）

前田 龍雲

十一、大正時代

1、大正時代

大正時代は大正天皇の治世を指し、年数で十五年間・期間は十四年間と日本史では一番短い時代である。日本近代史で年号によって時代区分された大正時代は、学術上は絶対的に認められた時代ではない。後世では大正デモクラシーに基づいた、明治期に成立した大日本帝国としての日本の最盛・安定期として見られることが多い。第二次世界大戦前の日本における転換期に当たる。

一九一二年（大正元年）は辛亥革命が終わって中華民国が成立した年に当たる。この時期の世界は、第一次世界大戦が起こった時期でもあり、その結果として敗れた帝国が続々と解体されて、ヴァイマル共和国などの共和制国家が多数成立した。大正年間を通じて都市に享楽的な文化が生まれる反面、スラムの形成、民衆騒擾の発生、労働争議の激化など社会的な矛盾が深まっていった。

大正年間には、二度に及ぶ護憲運動（憲政擁護運動）が起こり、明治以来の藩閥支配体制が揺らいで、政党勢力が進出した。それは大正デモクラシーと呼ばれて、尾崎行雄・犬養毅らがその指導層となった。この時代は、一九一八年（大正七年）の米騒動の前と後で分けられることが多いが、米騒動後、初めて爵位を持たず、衆議院に議席を持つ原敬が内閣を組織した。

しかし、原はその登場期に期待された程の改革もなさないままに終わり、一青年により東京駅で暗殺された。普選運動が活発化して、平塚雷鳥や市川房枝らの婦人参政権運動も活発となった。一九二五年（大正十四年）には、普通選挙法が成立したが、同時に治安維持法が制定された。言論界も活況を呈して、君主制と民主主義を折衷しようとした吉野作造の民本主義や美濃部達吉の天皇機関説などが現れた。

一九二一年（大正一〇年）に皇太子である裕仁親王が大正天皇の病状悪化によって摂政宮となった。力強かった時代の明治時代を見直す機運から明治天皇と昭憲皇太后を祀る明治神宮が建立されたのもこの時である。

一九二三年（大正十二年）に関東大震災が起こり、首都が壊滅的な打撃を受けたが、程なく復興した。震災後、山本権兵衛内閣が成立した。その後、第二次護憲運動（憲政擁護運動）が起こり、護憲三派内閣として加藤高明内閣が成立した。第一次世界大戦後には、ベルサイユ・ワシントン体制に順応的な幣原外交（加藤内閣）が展開され、中華民国への内政不干渉、ソビエト連邦と国交回復など、一定のハト派・国際協調的な色彩を示した。

大正時代は、藩閥政治に関わりを持った江戸時代生まれの人々が引退・他界していった時代で、試験選抜され高等教育機関で養成された世代の人々が社会の中枢を担うようになっていった。

2、書道界

この時代の書道界は、机上の研究から、小さいながらも一種のジャーナリスティックな世界をも形成し、盛んな論争が行われ、展示会が街頭に進出して一般の人に話題を提供するなど、次第に近代的な成長を遂げていく。

書道思想の普及、宣伝の新たな方策として、明治時代末期から大正時代にかけて書道の刊行物が発行され、今日の書道界におけるＰＲ運動の先駆けとなった。『談書会集帖』・『書苑』・『書道及画道』・『筆の友』・『書道研究』・『書勢』・『六朝書道論』などが発行された。また前田黙鳳は不便な出版事情にあって貧弱な法帖出版から出発して、古典資料の普及にその半生を費やした。

楊守敬より啓発を受けた日下部鳴鶴、巌谷一六の六朝書道、また、徐三庚に影響された西川春洞、さらに中林梧竹らの活躍によって、明治末から大正にかけての漢字書道界は華やかな動きを示している。

かな書道界でも難波津会の啓蒙運動が清新な息吹を注入するが、その中で最も大きな出来事は、小野鵞堂を主柱とする斯華会の活動である。多田親愛、大口周魚などが古筆の領域で研鑽を重ねていたが、鵞堂はこれに参画しながらも平安朝の草仮名を基底として独自の流麗なスタイルを案出し、婦人たちで習字をするものは、ほとんどこの組織で習うというほどの盛況を呈した。

西川春洞「篆書王昌齢春宮曲七絶軸」

日本書道史 (47)

前田 龍雲

十二、昭和時代

1、昭和時代

昭和天皇の在位期間である一九二六年（昭和元年）十二月二十五日から一九八九年（昭和六十四年）一月七日まで。歴代元号の中で最長であり、外国の元号を含めても最も長いが、元年と六十四年が共に「七日」なので、実際は六十二年と十四日である。第二次世界大戦が終結した一九四五年（昭和二十年）を境にして近代と現代に区切ることがある。

この日本書道史としては第二次世界大戦前までとする。

2、戦前の書

西川春洞門の豊道春海による大正末期の「日本書道作振会」の創立を皮切りに、大規模な書道団体の結成が相次ぎ、その団体による書道展が開催された。また日下部鳴鶴門の比田井天来による現代書の出現もこの時代の特色である。そして書道に関する各種の刊行物が多量に発行されたこともあって、書道の普及、発達が著しい時代であった。代表的な書家は、西川寧、日比野五鳳、手島右卿が挙げられる。

3、豊道春海

豊道春海（一八七八年～一九七〇年）は大正から昭和に活躍した天台宗の僧、書家。幼名は川上寅吉、得度後の僧名は慶中。別号に龍渓、谷門道人、天門海翁がある。栃木県佐久山町の出身。

一八九〇年東京浅草華徳院住職となる。九十一年より書を西川春洞に学んで、六朝風の楷書に独自の書風を作り出した。一九一四年、東京大正博覧会で千字文が銀牌となる。同年瑞雲書道会を主宰、一九三〇年に泰東書道院を設立し、戦後は日本書道美術院創立に尽力し、一九四七年日展に五科〈書部門〉を設置。一九四七年に院芸術院会員となり、六十二年天台宗大僧正、一九六三年大田原市の初代名誉市民、一九六七年には文化功労者に選ばれた。

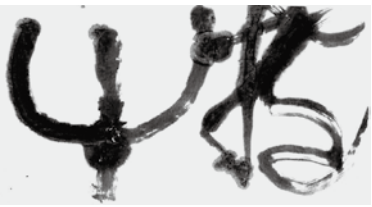
4、西川 寧

西川 寧（一九〇二年～一九八九年）は、二十世紀を代表する日本の書家、金石学者、中国文学者、文学博士。明治の大家、西川春洞の三男として東京に生まれる。昭和の三筆の一人。現代の書壇に最も影響を及ぼし、書の巨人と呼ばれ、印象的な作品を多数残した。

一九三三年、林祖洞・江川碧潭・鳥海鵠洞・金子慶雲と慎書道会を創立。清の書家・趙之謙に傾倒し、一九三八年から四十年まで外務省在外特別研究員として北京に留学し、山西・河南・山東省など各地の史蹟・古碑を訪ね、一九四七年より六十二年まで東京国立博物館調査員となり、北京で中国文学、金石学、中国書法を調査研究した。一九五九年東京教育大学教授、一九六〇年「西域出土晋代墨蹟の研究」で文学博士、一九六四年國學院大學、東京大学文学部講師。一九八五年に書家として初めて文化勲章を受章。没年に、正三位勲一等瑞宝章を追贈された。

5、手島 右卿

手島右卿（一九〇一年～一九八七年）高知出身の書家。一九一五年、川谷尚亭の門をたたき、師逝去の後上京。比田井天来の門下となる。大日本書道院第一回展で天来の単独審査を手伝うなど、次第に頭角を現し、以後日展の参事や審査員、文部省指導書編集委員などを歴任。「書は人間の霊知の所産である」として、東洋的な精神性と現代感覚を融合した「象書」を創始。空海などの古法を基に確立された小字数書の能書家。一九五八年、ブリュッセル万国博覧会「近代美術の五十年展」に日本代表として富岡鉄斎、梅原龍三郎、井上有一とともに指定出品された「抱牛」は、最高殊勲金星を受け、一躍世界の注目を集め、書道芸術の国際的評価を高める契機となる。



手島右卿「抱牛」

《中国・日本書道史参考文献》
・『書跡名品叢刊』（二玄社）
・『中国法書選』（二玄社）
・『原色法帖選』（二玄社）
・『和漢書道史』藤原鶴来（二玄社）
・『日本名筆選』（二玄社）
・『原色かな手本』（二玄社）
・『中国書道史年表』玉村霽山（芸術新聞社）
・『日本書道史年表』名児耶明（芸術新聞社）
・『書の古典美』飯島春敬（書芸文化新社）
・『日本書道史』名児耶明（芸術新聞社）
・『墨』各号（芸術新聞社）
・『図説日本書道史』（墨スペシャル、芸術新聞社）
・『日本書道史』中田勇次郎、書道芸術別巻（中央公論社）
・『日本書史』石川九楊（名古屋大学出版会）
・『近代書史』石川九楊（名古屋大学出版会）
・ウィキペディア